（遞信省認可）

掲載要目

懸賞文藝 半襟を贈る

美妙齋氏の 駒物語

いらつめ

第七十九號

明治廿四年二月廿一日發兌

小説花織錦

小説大家が時計屋へやッた手紙●諸織物値段いろ〳〵

文學小言

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第七十九號目次（明治廿四年二月二十日）

無名小說（二）……………………………………………神田一女生

人に半襟を贈る（懸賞文藝）

女子終身の敵―嫉妬心

印度男子の猛惡

玉屑一函（泰西格言）

小說大家が時計屋へやった手紙

倫敦の蝶

五つ紋の羽織幷びに羽織の古式

駒物語（一）………………………………………美妙齋主人

韻文

其處の花…………………………………………………美妙

秋月明……………………………………………………明日香主人

秋夜（譯韻文）…………………………………………明日香主人

譯韻文二種………………………………………………美妙

小說花たりよしき（一）………………………………藤廼舎由縁女

文學小言

文學者の腕前＝言語の進化＝文學の幻想

寄書

工學士大竹みどり先生へ………………………………秋水樓主人

再び三坂嬢へ（言文一致論）…………………………掬澤庄吉

去年の名作………………………………………………まゝ子

解嘲…………………………………………………………掬澤庄吉

通信問答

諸織物値段いろく

いらつめ定價

並製

一部金五錢、府外郵稅別に五厘
六部金二十七錢、府外郵稅別に三錢
十二部金五十四錢、府外郵稅別に六錢
二十四部金一圓、府外郵稅別に十二錢

別製

一部金八錢、府外郵稅別に五厘
六部金四十七錢、府外郵稅別に三錢
二十四部金一圓八十八錢、府外郵稅別に十二錢

（別製は最良の洋紙に印刷し且毎号内外國景色、風俗、社寺、美術、動物、英傑、學者、美人等の寫眞を必らず少くも一葉以上添へ、讀者の娯樂に供します。）

●毎月二回發兌（五日二十日）●府內無郵稅●金子御差し送りの手續きは小爲替ならば拂渡郵便局とある處に（神田郵便局）と記し受取人欄內に（神田区永町九番地成美社）と御記入の事●郵劵代用には五厘切手で一割增の事●日本へは五厘切手で並製五錢五厘別製八錢五厘領收の上差し上げます●廣告料一行八錢割引無し

從第七十八號至第八十二號五部版權所有

明治廿四年二月二十日印刷　明治廿四年二月二十一日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　東京市本郷區駒込西片町十番地居住　山本鑑之進

發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

○懸賞文藝新題

○第四十回題（何でもよし）
右　櫻陰天女圖……………………………………三月十日〆切

○第四十一回題（何でもよし）
右　愛らしい物四つ……………………………………三月廿日〆切

○第四十二回題（唱歌文章）
右　日章旗……………………………………四月十日〆切

○第四十三回題（何でもよし）
右　花の色……………………………………四月廿日〆切

○第四十四回題（唱歌文章）
右　風鈴を買ふ……………………………………五月十日〆切

○第四十五回題）唱歌文章）
右　御きぬ……………………………………五月廿日〆切

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第七十九號(明治二十四年二月二十日)

無名小說

神田一女生

第二回(續)

萬一とやう言ッた處で親の威光とき光りける什何の手間暇しかしかの圍者あるとれふこと長官の耳に入ッたら破談にならう、何しろ早くと夫婦さ嬉し喜んで、挨拶さへそこ〳〵に歸へるや否や悴をそばにひき寄せて、かういふ仕合せな事又とあるもれか……なのみよ次とやら早く、一刻も早く離緣して……しあよよッたらその子丈引き取ッて世話してもよし。何しろ此れ吉い咄し取り逃がしてゐるものゑ……先々おまへれ世話にもかゝらう、是非よ〳〵と兩親の板ばさみになッた秀樹、子までなしたみよ次今更離緣して……そのねでもあい醜評れ立ッた心よ染まぬ妻むかへるは身をれらるゝやうつらけれどあるはど是をすげなく斷ッたら……私事に免職……不道理れ免職喰はせるやうあ長官戴かねといふ見識はそなへて居ど身の上が心配とやう〳〵思ひ定めて今度兩親が來るについて暫くと親元へやッてあるよ次の許音づれ、そのあと〳〵ッくりと言ひ聞かせ、かういふ事故何事も是までの緣となきらめ、相應れ處もなッたら片附いてくれと男泣きに泣いての賴よ、もとより素生の女、それもこれもなあたのお爲めとなれバ今更愚痴ハ申しませぬが心よかゝるはこの幼子どうぞ可愛がッてやッて下されまし〳〵是非も無く〳〵一生不通の緣切りて、別れた後迎へたのが長官の娘、今の妻君、それおしても不思議なるハ長官の心、月山にはみよ次といふ子までなした圍者れあるあとも承知、それで可愛い娘嫁入らせる所存斗られぬと怪しむ人もあれど是にはいろ〳〵譯のなること、其令孃ハ一時馬丁とあられぬ風評立ッた處から誰も貰ひ人れ無いすたれ者、それよ二千圓の持參金つけて、月山へおはあを向けたのは、月山はもと長官の引き立てゝ官途につき、兩親ハ大の欲張主義、それと知て向けた相談、案の定かくまとまりたり。しかし芳子も一時ハ醜評を立てた身なれど根が馬鹿で無いこと故秀樹が實はかうした者に子がなッて、その女ハ離緣したれど其子だけ世話せねバならぬ、何分賴むと包ゝかくしのないことハうそ〳〵兩親から聞かねでもあれ咄し、よく承知して、その翌日から靜子を引きとり乳母とかゝへ、やさしくする殊勝さ、秀樹も案外な人物でなッたと喜べば、中も睦まじく、風波もなく暮し、間もなく昇等し、引き續て身分不相應の立派な邸を駿河臺にもとめ、是に移り住んで、樂しく日を送り居たり。然るにこゝに引き移ッてより近邊よ小さな家を求め、住はせたれハ昔秀樹がある危急の場合お代て身を捨てゝくれた興助といふおやぢの悴夫婦、是までも出入の車夫として居たれど今度ハ何ぞ商法でもするなら過分のあとハ出來ねが資本位出してやらうと何も昔しれ恩に報ゆるこゝろ、深切よ育てるれど何の勿躰ない、只是までのやう

に車夫にして、御見捨てないやうなとばかりたッて辭退してうけ引かねばいふにまかせて抱への車夫として、目をかけて置くうち、持たが病ひある日主人を送ッての歸り途、酒の上から仲間の者と喧嘩を始め相手にひどく打たれしのが元となッて、二三日たッて遂に往生、女房も丁度懐妊して、五月目泣きの涙で葬をすまし、七日々々の佛事もかたの如く行ひしやう／＼十月目に産の紐を解て男の子産をおとしたもの〻、心配した爲めの七夜たつか經たぬになき人の數に入たもうなさ。何より不便なとおとに殘ッた赤子、父も知らぬ、母も知らぬ、引きとる人もない仕末と聞いた秀樹、連れそッて、四年にもなれどまだ子の無い今の家内、與平とて車夫とまで落ちぶれても居たもの〻、元はやッぱり武士のかたはし、素性は賤しからぬもの、昔の恩もあることも故、この孤子引き取ッてわが子とし、先々見込があッたら月山の家つがせやう、さすれも死んだ與助初め、悴夫婦もさぞ滿足におもふであらう幸ひ靜子の乳母の乳もあれもと慈悲深い心から引き取ッて、我子としたのが靜子の四つの時、名も秀吉とつけて、靜子共々誠の子も及はぬほど可愛がッて育てる處靜子は育つに從ッて生の母に生きうつし、何處といッて点のうち處のない顔だち、乳母も自慢に手を引いて出ればお人形樣のやうなと世間の評判、年頃になッたらと近所の下宿屋で書生の噂さ、秀吉も幼のはの可愛らしさ、すぐきて發明な生れだち、月山君も

よい子持たれたと人の羨まざるほどなは嬉しく芳子はさういふものか生の子の可愛さ知らず、只二人を並べて見ても兩親一年も二年も生ひ延びたこゝろち、はやく脊丈延ばしてと只々く二人と手のうちの玉のやうに慈めば、世間でよくある繼子いぢめの譏り受くることもなく、一年經つが長いやうなと芳子が時々いひ出で〻も笑草の種となれり。　別けて秀樹は靜子の面ざし忘れかねる種となりて、思ひ惱むこととなるべし。

「近いうちに二人に種痘させましやう」「つひ此間したぢやないか」「でも又大變天然痘か流行るさうで御座いますから。ねェ婆や」とあれにも是にも氣を揉んで、育てる親心、是を思ふも我儘のわの字もいはれた義理で無けれど又親の身になると折ふしは我儘いはれて見たきこともあるならんが一年が長い一日がたちよくいと子故にうか／＼月日をくらすうち、いつか靜子は十五、秀吉は十二になッた年の春何日までもお坊ッ樣と口くせのやうにいッてゐた乳母、俄に國へ歸らねばならぬかなしさ。　僕も婆やをかへすのはいやだと慕はれる程別れがつらく、されバとて留まるわけにもゆかぬ、今お別れをすれば又お目にかゝることがあるかないか。　是ほど御両親が可愛がッてお出でのお二人、心配のことはあるまいとおもへど今奥樣も御懐妊、もし御誕生になッてからふッとお心が變るまいものでもない……一通りお耳に入れて置きたい御身の上と別れる前晩秀樹夫婦が留守を幸ひ、御姉弟のお身の

上はかく〳〵しか〴〵、今では何處にお出かしらねどなあたには生の母御が外になり……私の眼が黒いうちはとうともお二人のお力になるつもり、御心配の事があッたらおつゝみなくお手紙でと呉々靜子にいひ殘して、それ翌日遂に靜岡に立ちたり。　靜子ははじめて聞いた一伍一什、己が身の上、弟のことあれど、東西も知らぬ時から生の子にまさる慈愛を受けた今の母親、別に生の母ありと聞いてもさまで今が今逢ひたしとはおもはねど、それは人情そのとなし聞いてから、折ふし逢ひたいとも見たいとも思ふ心が出て、私が生き寫しだといふからと鏡を出して、己が顏うつしてはかういふ人かとおもひ居りしが後に弟へのはなし。　何も知らぬ秀吉は實の親とおもへばこそ遠慮もなく我儘もいひ、すねても見る。それ隔てない仕打が却ッて可愛く思ひますと折々兩親が是まで懇意の者へ物かたる。　泣て乳母に別れてから六ヶ月目、其年の九月に芳子は安産、しかも男の子。　子は無いものと斷念めてゐた秀樹……それに男……家内も大喜び、名を春雄とつけて、三人姉弟となり、一家はます〳〵賑やかに月日をおくりゐたり。　秀樹の兩親はそれ後わづらはしき都より氣樂な田舍にと三重縣へ立かへり居りしが、間も無く死去せしと聞きぬ。

第三回

今日は麗かな日なれば開け放したる六疊の座敷床しき作りにて地袋違棚かたの如く備はり、床木床柱は黒柿にて、水色の壁に白茶綸子で仕立げた横物をかけ、圖は山田一豊の妻が夫の前に良馬を買ふ代にと日頃貯へ置きたる黄金をとり出したる繪樣心有り氣に見えたり。　前には櫻を七本活にしたる宣德寺の花瓶を紫檀の花臺にのせ、右の床壁に袋かぶりたる一聯の琴たてかけられたり。　違棚の下には湖月抄と書きたる本箱なり。　棚の上には漢書洋書の類數多積み重ね、それ傍には可愛らしき置時計を置きて、下の段には二三冊の寫眞ブックあり。　それに此頃珍らしく目につきしも本箱の側になる雙六盤なり。　黒塗に金で小松の蒔繪、新しき物とは見えねどさまで古き物にもあらず。　床を右にして庭の方に向ひ、紫檀の唐机とすゑ、上には定めし中も梨子地とも思はるゝ蒔繪の硯箱、埋木の筆立、中には四五本繪筆と羽箒を立てたり。坐敷の一隅には桐の衣裳簞子あり。　掃除丁寧に行き屆きて、諸物の配置よろしきを得、實に床しき住居なり。　すゑつけたる机あれば常に住みなるゝ人あるべし。　かざりつけの工合より考ふれば必ず淑女が部屋の持主なるべし。　先きの程より一間二間隔りたる彼方には若き女の笑ふ聲すれど爰へとては來るべくも見えず。　置時計は主待ち顏に今しも三時を報じぬ。　折から玄關に車のきしる音して、間もなく細き笑ひ聲と共に入り來るは和裝と洋裝の二人の少女、年の頃も同じ位、まづ和服の少女机の前に行きて、帯の間より懷中とお

はしたる小さきつゝみとり出して、机の上に置くを見れば是れぞ主人の少女なるべし。一人の少女は手に帽子と手袋を持ッたまゝ坐りもせず、床にかけてある軸をながめ居たり。

主「花子さん先こゝにお坐り遊ばせな。何を見て居らッしやるの……あんなら倚子のある方に行きましやうか。」

客「いゝえよくッてよ坐りますよ。この掛物は山内公の夫人ですねェ……實にいゝこと。」

主「いゝでしやう。それで私が先達而から先生に願ッてやうやうつひ此の間出來たのを直ぐ經師屋にやッて、きのふの朝持ッてきてすぐかけたのですよ。」

客「本當によくッてねェ。」

といひながら鳥度あたりを見まはし、持ッてゐた帽子と手袋と簟笥のそばに置き、

客「いつもあなたはきれいに片附けてねェ。それに雙六盤なんぞあるから何だか昔のお姫樣のお部屋へ來たやうな心持がして、行儀をよくしなきやならないやうだわ。」

主「おはゝゝをかしなことをおッしやるのねェ。まア蒲團の上にお坐り遊ばせ。よく今日は尋ねて下すッてねェ。よッぽど久しくお目にかゝりませんでしたね。」

客「さうよ本當に大變御無沙汰しましたわ。それだから今日はゆッくりと早くから來て、どの位待ッてゐたか知れませんわ。私が來るだらうとおもッて、逃げたのでしやう。

本當にひどい方ねェ。」

主「ことによるとさうであッたかも知れませんよ。」

とにッこり笑ふそのうち下女が茶菓を持ち運んで、おきまり通りその邊に陳列したり。主人の少女が茶を徐かに飲みほして、

主「弟が毎度上がッて、お世話になりますッてね。お伯母樣によろしくお禮おッしやッて頂戴。」

客「いゝえ何日入らしッてもちッともおかまひ申しやアしないのよ。今日はお醫者樣に入らしッたッて、何處かおわるいの？」

主「なアに相かはらずいつもの頭ですから見てもらはなくてもいゝのでしたけれど一昨日からあんまりひどく頭痛がしますから……仕方がありません只冷やして居るのがいゝといひましたよ。」

客「いけないのねェ。あんまり勉強なさるからでしやう。」

主「いゝえ毎日々々遊んでばかりゐますけど……なぜだらうとおもッて自分のからだがにくらしくありますよ。學校の先生がたも別におかはりもありませんか？」

客「えゝ皆さん御丈夫、田村先生は何日でも月山さんの退校なすッたのは本當にをしい學校の良生徒を失ッたのだッて何度仰るか知れませんよ。」

第三十六回懸賞文藝應募得點

題　人お半襟を贈る

●和歌

わがぬひし襟のさくらの花びらよ
君が色香をうつしてや見む…………本吉そは（ヒダ）

とりわへ老後のしるしに贈らまし
こいむらさきの襟のうたひら…………耕雲（ヒサカ）

からよしきつたへ〳〵し襟なれば
半ばわかちて君におくらん…………横山ひろ（ヒダ）

以上三首第四等賞

目に見えぬ心の色もながめてよ
今更おくるからなゐれ襟…………三阪れぬ（ヒサカ）

冬衣かさね逢ふべきしるしとて
わかるゝ君におくる襟かな…………本吉みは（ヒダ）

以上二首第三等賞

●唱歌

（イ）　柏　翠（イヘシロ）

年たちのへる今日の日と　祝ふておくる半襟は
君が操にたぐひつゝ、　雪にも色こまさり地よ
薄紅梅れ花模様、　掛りて睦月をいこひなば
嬉しからましわがこゝろ。　嬉しからましわがまこゝろ。

（ロ）　水　野　秀（オホサカ）

別れしむかし今もなや　雪と花とにおもひ出で、
三年のゆめもなつかしゝ。　かとりもわわき一そぢの
うすき墨繪の半襟も　ふかき契りとうさ祢んと
送るす志をうけよきみ。

以上二曲第四等賞

●文章

（イ）　耕　雲（ヒオ）

「お元さん、お内でそか？」

「お秋さんで？　入らッしやい」。

言葉のまだ終らぬ中に—親友の間柄とて遠慮もなく—早や其居間よ這入ッて、何を言ふかと思へば、

「そら昨日お求めになりましたね。どうぞも一度見せて頂戴」。

「おやなんですねエ唐突に……」

言ひつゝ—微笑を含んで—革文庫から取出す襟。秋子孃は直ぐ手に取り上げて、羨やまし相に幾度か捫繰りかへして—氣の引けるほど—言葉も無く一心に見詰めて居るは餘程ろ其れと渴望の樣子—渴望、其頻りに訴へ來る熱情、哀れ制し兼ねて終に飜した一片の桃唇、

「妾あんなのが欲しくッて……何處にもありませんですわ。朝ッから駈け廻ッて來たのですが……」

「さうでしやう、妾の往ッた時も一つしかありませんでし

た、景にも噯にも……」

「何處かに有りませんでしやうの？」

「さうですね！」

言ッて俯向いたきり——一人は落膽、一人も氣の毒といふ顔

相——が、何時しか双方の首は其向きを轉じて、思はずも同時に集まる襟の燒点、發矢！　互の視線相擊ッて一種の電光。

「ほゝゝ」

＊　＊　＊

文机に凭れて何か思ひに沈むは秋子孃。　折から此處へ下女、片手に手紙と今一つと……中は何か白紙に包んでもたらしました。　誰からかと訝りながら其手紙の表書を見れば、秋子樣、元より……手早く封押し切ッて讀下せば、

前刻も折角お越し下すッたなれど……つまらぬ襟を御熱望の樣子にお見受け申しました。　で、皆差上げたの精神、が、妾も一つしか無いものですから、お心にも染ますまいが半分だけ進上、併し下着かしら……その主意。

不思議！　之を讀終ると直ぐ秋子孃は彼の紙包を押開いて！宛がら信田の杜の白狐が聟を戻して貰ッた時の樣に——嬉しさうに微笑んで

「でもお元さんは……」

大串艶子（ナガサキ）

（ロ）

兼ねてはあまり好しからぬ方なれど、お友達の事、病氣と聞いては流石捨てゝも置かれず、見舞に行けば不思儀にも醫者嫌ひとの事。唯ぶら〳〵ありと一口に容易くはいふものどうも呼吸苦しげある摸樣、夫れにあまり長きものにもあらぬを蜜柑が好きとか。　容体を問へば、答へも曖昧よくも解からず。　何とあり心掛りあるまゝ歸り際に女中の一人に尋ぬれど、これは如何に只輕く打微むのみ。

日經て鈴木に行いて寫眞ブックを繰る中、發矢！　目を貫きしも中板に男女の肖像！　よもやと思へど疑もなき一人も春木金三、婦人も高原宮子孃、見れど見れども違ひなし。

噫、これでこそ先日の容体も略ゝ推し量らるれ。

風采はよし、小才利かして立廻るより年弱の常とて顔あからめたる事ありしと見て取てれ此贈物。　特に半襟を贈るは願爲輕羅との古意、摸樣は松にかゝる蔦蘿、操のそらぬ貞松に何とやらとげに面白き思ひ付き。　今少時早く此半襟來らんには……あゝ恐ろし春木の輕薄男奴、汚らしく見るも嫌あり、置くも胸惡ろし。　いざ突き戻さん。　いざや送らん此の半襟。

あすか（イヘシロ）

（ハ）

「新年御目出度う存します……」

「昨年中はいろ〳〵……」

「どうぞ今年も相變らず御願ひ申します」。

「貴女はどうして私の皈宅致したのを……」
「昨夜ね先生の御歸りにあッて御出遊ばした處とね夢に見ましたから今朝母に話しましたら夢も中々中るものだ、私も昨夜同しやうな夢を見たから伺ッて見たら宜からうッて申しますので……」
「はァ左樣ですか私も后刻一寸……と思ッて居ッたのですが。でも私を出し扱いて私の心許りが上ッたのでしたらう。ねエヽヽヽ」
「おほヽヽ左樣かも知れませんのねエ。 歳暮から年始めへかけての御上京、時節柄嘸種々の御感情が……どうぞ御土産に面白いお話しを……」
「何に別に面白いと思ッたことも有りませんの。 只どさくさが歳暮の實況で、がやつくが年始の異相ですものを。好い迷惑をするのも飾り松と竹でしやう。 清淨無垢の山林から伐り出されて、其虚心も傲骨も腐敗の空氣と万丈の紅塵に俗了されてしまふのです」。
「面白い御議論ですこと。 清淨無垢の界を出でゝ、都門の空氣と紅塵とに染められるのも只植物の松竹許りではありませんよ。 それで両親なども私の遊學―東京に―と許して呉れませんの」。
「それも左樣ですねエ。 もう一つ御土産があります。これです」。
「まァ好いこと。 そして氣高いこと」。
「斯樣な風なのが當時東京で大流行なのでも。 世話にいふ「襟元につくやうな人」でも貴女に嫌はれるのも必定ですが襟元につく品でもから持ッて來たのです。 お母さんに御目に掛けて笑ッて下さい、見立の下手なのを！」
「否ですよ、斯樣なに御見立は御上手でゐらッしやるのに。御深切の籠ッた品、御遠慮なく頂きましやう」。

(二)

水野秀(オホサカ)

さても四年の長き日を浪華の空に送りての歸省、別れ惜しき涙は乾き、花下月宵の思ひ、雨夜雁聲の悲みも夢と消えにし今日の歸省、神ぞ嬉しき歸省かな！ 無形の品てこよなき土産！ 所望されし母のためには……義理なる姉にはなに？ おゝそれ〳〵と汽車に乗りては一日の旅、夕日にこく〳〵入らぬ間に出迎ひ玉ふ母上は、
「おゝよゥく歸りて呉れた見かはッたよなア。 おゝ無事で歸てくつろいだ」。
「阿母さんおたッしやで誠に……」
「いやもう挨拶なんさアよして、奥の炬燵でゆつくり話が聞きたい！ おゝこれ其處で話さずともいゝよ、姉妹ともさアおいで！」
「ひィやようお歸りだ。 阿母さんと待ちかねてゐたの」。
「あれまア阿母さんひィはお土産を……お土産なんさア持

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たずともいゝよ。阿母さんはねヱ寫眞を見ては待ッてばッかりゐらッしやッたよ」。

「お土産はゐるに？　半襟……あれは白茶の一樂か？　四條風の墨繪ぢやな、美しいこと！　お氣に召しましたか？　れはゝゝゝ」

「阿母さんひイが卒業證書を見せたうへこの美しいお土產まで……こそは勳章よりも嬉しいわ」。

「ひイが歸ッたら正月らしいよ。福でも來たのか知ら……賑かにあッたねな」。

「ひイは福の神か？　おほゝゝ妾も大坂見物して、福の神にありたいね。おほゝゝ」

「姉さん笑はずに春衣にかけて下さいな」。

「かけたらよウくうつりましやう！　お母さんひイは誠にやさしい娘だねエ」。

「姉さんだッてやさしいよ。新聞に孝行ものだと載ッたんだもの」。

「おほゝゝ恥しい……それなら誰でも孝行ものといはれるよ」。

椽（ホ）

雅水子（トロケイ）

椽先に腰を掛けて、赤子を抱いてゐる年の頃十五六の下婢、餘念なく赤子を相手に遊んでをりました」。

「何ぞの面白くッてそんなにお笑ひ遊ばすの？　れ庭で姉さんたちがお羽根をついてゐるのが面白いんですゥ？　ああたも早く彼の姉さんのやうに大きくおなりあされてお鞠やれ羽根をおつき遊ばせ。ほんとに可愛い子！　まづ小便は出ませんか？」

そると赤子は—母の乳を飲みすぎた所爲の—ヨッと泣いて乳を澤山吐いて、其衣服は勿論、下婢の襟れあたりまで汚しました」。

「奥さん！　また赤さまがお吐し遊ばしましたよ。お乳を！」

下婢の聲を聞いて、私は急いで其れ傍へ走りよッて、絹の小切で殘らず拭いてやりました。

「阿村の着物まで汚したの？　氣の毒であッたね」。

「いゝえどういたしまして」。

やがて私は簞笥の引出しから半襟を取り出して、

「お村！　この半襟は一昨日親類から貰ッたのだがお前にあげるから其汚れた襟の代りにお付けよ！　麁末の品だけれど……」

「奥さま！　難有うござります」。

目（へ）

三阪きね（サカヒ）

目にうつる絹布の飽かぬ色、昔し幼心に起した「呉服屋の子になりたい」との感じれ今も餘胸に除かれぬ可笑しさ！　ひそかにはゝ笑ゑと頬に洩らし乍ら店に腰掛けてゐる中やが

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て番頭は「見せて」と言ッた半襟を把ッて出しました。
「こんな新形のもございます」。
數いろ〳〵心にこれと極めて來る決心も今更何と無う動くやうな。
「此の鳥羽色のは？…………」
「お直段で御座いますか？　へい……裏の方に札がついて御座いますが……」
「あゝさう」。
見ればの價も貴くなし。　之と變へやうか？
「此方のは如何さまで御座いますか？　近頃はよく御賣れ申します」。
「其の青竹の？」
「青竹のも……で御座いますが、今むらさきの方で……へい」。
今紫色、思へば昨日女學校の歸り途、貞子さんが誰かのを見て「わたしも買はう」と仰ッた品……あゝさうしやう。
「之に致します。　二つ貰ひます」。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

持歸ッた半襟、母は見て
「青竹といッてたが……無かッたのかえ？」
「もい有ッたのですが……變へましたの」。
「二ツも？」
「一つは貞子さんに上げやうと思ひますの」。
「おゝそれはいゝ……いゝ處へ氣がつきました。　貞子さんはいつも御深切にして下さるね……此間簪を貰ッたのも彼の方だらう？　すぐお鍋に持たしておやり！」

以上六章第四等賞

（ト）　　椙　さち子（トウケイ）

年のはじめにほころび初し庭の梅見つゝそちこちとながめて折とりし花を手に持ちて、庭下駄のまゝ枝ぶりを見てゐる廿一二の若者部屋の障子あけて、十四五の娘顏を出し、
「兄さん本所へ使やりますが何の御用は……」
「さうか丁度よい。　此花持たせておやり」。
「はい。　此繪御覽なさい。　誠によく出來ました。　その梅の花と同じ心に」
「さうだうまくやッたな。　これは何んだ？」
「はゝ襟ですよ」。
「ふんさうか、なるほど。　そのあつい物何んだ？」
「これも裏襟ですよ」。
「女もやッかいな物だ。　襟まや　裏付けて遣らなければならんか。　中々やッかいだ、はゝゝ」
「おはゝゝ御母樣がお上げなさるのですもの。　早くつゝみましやう。　一樂織も中々よい。　それから此白あやに梅

の繪のと二つ」。

「そら裏襟が落ちたよ」。

「やんに裏を落したら御母様に叱られるだらうに、ほゝゝ」

「だからおそがゐないといつでもさうだらう、そゝゝ」

（ナ）　醉香（トウケイ）

「お秀さんお目出たう、相變りませぬ……」

と流暢に語る娘、顔面の肉つき優しく、目口は邊に言はれぬ愛敬ありて、其上眉と額の間は此娘は高尚なる氣格が顯れてゐます。之を花に例れば春の初め爛漫と咲出る彼岸櫻、繪なれば土佐派の者でしやう。而して其衣服のあまり艶麗ならず、それとて素撲といふ程でもなきは淺墨淡彩を以て名ある和亭先生の繪でしやう。

「お目出たう……お俊さん大層お早くから……」

と答ふる娘、容貌はお俊より優しいが愛敬に乏しくて、而して鼻の少し高過ぎるのと背の少し上ッてゐるのが微瑕です。然れども其清朗なる音聲と快活なる擧動とは此瑕を償ひます。之を雪と凌んで咲き出でた梅花、繪あれば雄健なる幽谷先生の筆に比へるは適當でしやう。其衣服の質素なるは喜ぶべきも時流に媚ぶる風あるはまさしく四條派の繪でせう。

お俊は持來りし服紗解きて、何やら紙包取り出し、水引の亂れを一寸直して、

俊「お秀さんこれも麁末な者ですが……」

秀「おやお年玉ですか？　それは難有う」。

と押し戴けど、

俊「いゝえお年玉と言ふやうな立派な物でないの。唯人から戴いたからおふくわけをしたれ」。

秀「あまり失禮ですが一寸拜見しますよ」。

と包みを解きて、

○「おやおや粋な半襟だこと。白茶の地に墨繪で梅が出てゐますね。私ほんとおうれしくッてよ……此間から此形のを買ッて戴かうと思ッてゐたの……」

とつくづく眺めて、

秀「唯れがこんな新形を考へ出したのでしやう？」

俊「私聞てよ……何でも四條派の高橋とかいふ先生が下繪を書いたのでそと」

秀「さう……流石に畫の先生だね……こんな形を思ひ付いて、、、、、、、、お俊さん私し繪を習ひたいわ……」

よ。

と急に謂出せばお俊は不思儀さうな顔してお秀と見つめて、

俊「なぜ……」

秀「なぜッて、畫と習ッて、こんな意氣な摸樣を考へ出して、其通りに着物を調へて戴いたならさぞ嬉しからうと思ッて」。

何につけても移ま易きは少女の心、可愛らしきは無邪氣なる小娘の話なり。

（リ）　藤元なる（ヒナ）

高砂濱れみどり松、幾千代までも其色を變へじと思へば去年さくら蔭、月匂ふ彌生の夕、眞心を籠めて互に約した此方、或は雪を踏んで深草の君を學び、或は雨を侵して白河の院を氣取り、幽知れぬ一危い怖ろしい一人目の關を忍び踰えて、水晶簾薫らす椒閨香れ煙を見ながら、鴛鴦の情濃やかに、深窓のつれ〴〵客舍の懶さを慰さめ慰めらるゝ時の嬉しさ！ 嗚呼前生は何たる德を積んだか？ 今尚斥鷃さへも棲まぬ田舍に育ッた身が昔鳳凰が翼を留めた此都の大家の令孃に……そも何たる宿緣か？ 今日も亦男名前でわざ〳〵贈られた玉章—て、一週後の初卯の日、梅屋敷で和歌の會、其日の夕まぐれには必ず香雪亭まで—それに添へられての此寫眞—ても此眼元の潤しいこと、此口元の優しいこと。 此眉、此鼻、何處一点の不足ない玉の顔。 そして此白絹に包まれたやうな美しい首筋、此着物は縮緬か一樂か。 「おや今まで忘れてゐる、あの最前買ッて來た半襟—いま紫に梅の花をこぼした京おめし—此頃令孃達に此樣なものが流行すると彼の番頭も言ッてゐたから……まさかに… でも取敢へずあのお乳母さんの手許まで……」

わがのふみならうちも置かれず
返すさへ手や觸れけんと思ふかぞ

扨も廣い世界の多い男兒の中には此歌の意につまされるものも少なからぬ有るよ、あゝ此身ものりが何故？ いま吾手よ觸れた此半襟、けふあすのうちには必定あの龍子孃の手に……そして其つや〳〵しいあの首筋まで！

（ヌ）

三阪絹

春の日の長閑さ。 靜心なく散る櫻の花瓣に戯れる小魚の動きの其他にはさゞ波も起らぬほど。 此池に影をひたす二階は小座敷、對話してゐるのも二人の令孃でした。 親しう打解けてゐる具合、外所の見る目にも床しいもの。 今しも唐木の机に身を寄せかけてゐる孃は片頰にはゝ笑みを洩し乍ら、

「そして其題は何といひましたの？」

「エステチックスを講じ、殊に光彩の部を細論す、といふのでしたの」。

「長いのですねエ」。

「御演說の時間も題につれて、二時間ほどでしたよ。 然し折々珍らしい事實が交りましたので皆よく聞いてゐました」

「休まなかッたらよかッた。 あとからの小言が五月蠅、といッて無理に連れて行かれましたの。 惜しいことしましたよ……英佛の引例は定めて澤山有りましたらうね？」

「例の通りでもよ……野蠻人は派手な色が好きださうですねエ」

「さう」で

「視力が發達せないからと仰ッてゐましたわ」。

「はゝ、さうするとわたしも……」

何思ッたか云ひ乍ら起ッて、違棚から出して來たは……見れバ紫色の半襟でした。　膝に置いて、

「淡紅で櫻の花がこんなにこぼれてゐますその矢張り野蠻人向きですかねエ？」

「野蠻人の好きなのも赤——赤だとのことでしたよ……買ッて入らしッたといふのも是？　い〻取合せで御座いますねエ」。

「ほんとに如何でしやうね……ね松子さん。　今更ちと嫩々過ぎるかとも思ひますの」。

「い〻でそとも！　御年頃によくうつりますわ。　半襟の色の配合を論じて、其梅子さんとの關係に及ぶ、とでも長い題を置いて、わたくしも演じましやうか。　はゝゝ」

「はゝゝ母も之がい〻と云ッたんですが……まだも一つ買ッて來たのがあるんですよ」。

「どんなの？」

「赤ですよ。　はゝゝ」

「いぢめては嫌……野蠻人だといッたのハ校長さんですよ。わたしぢやアありませんわね。　又年によッては誰でもうけますわね。　はゝゝ」

＊　○　○　○　○　○　○　○

西日が茜を水に碎いて、夕霞も遠くの野邊から暮の色を送ッて來た頃、松子は辭して家路に歸りました。　其翌朝、梅子から送ッて來た一包、何？と服紗を開けバ——

「ぁ〻淡紅地に紫で蔦を散らした方！　これは昨日彼家で『こんなのが欲しい、わたしも兄さんに買ッて貰はう』と云ッた品だよ」。

以上五章第三等賞

女子終身の敵——嫉妬心

女子の終身に亘ッて敵と爲るものは劍戟で無く、彈丸でなく、毒でなく、刺で無く、唯一つの嫉妬心、即ち是です。　之がゝ先には身も亡び、操も無くなま、智慧も曇り、天が人間に賦與した最大幸福「愛情」の眞の味も味ハへず、零落無殘、哀れ果敢なく爲つて了る事です。　ならば嫉妬心ハ女子に取ッての大毒藥、害は有るとも益ハ無いか？　が扨また左様でも無し、幾分か利も有る、いやむしろ中々の利も有る、即ち之を大毒とし見、其用ゐるべき處に向ッて方向を誤たず用ゐれば又捨てられぬ處も有るのです。　思ぬに嫉妬心ハ砥石、少しく、巧みに用ゐれバ建全の能はあま、もしも多歡に用ゐた日にハ悔て及バぬ害が伴なひます。

つらく考へて見る。　五六歳はじめて學校に上ッた時から白髮棺に土をかぶる時に至る迄世の中ハ摺ッた揉んだで皆持ち切る——それ處で負けきバ口惜しゝ、勝てバ快し、人間の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

天性快樂を望み、不快樂を避ける處から自然に他を羨む心も起る、羨んで自分がさて其地位に達すれば佳し、達しなければ忌々しくなる、即ち羨む向ふの相手を嫉む、こゝに至って一種の惡德嫉妬心が象られるのです。

嫉妬心の成り立ちが右の通りであるとすれば、其惡く向ひた方の結果がどれ程惡いものにもしろ、其出來た初めに於て必ずしも一概に斥ける程の惡性を以てゝ無いとは智者を待たずとも知れる事でせう。快樂を望み、不快樂を好まぬのは自然の人情、たゞくそれを恣にし、人を羨むといふ關門を踰え越えていつか嫉むといふ奧に入る。此奧に入ればこそ惡いのです。關門迄到着して更に他の方向を執るに於て何の微塵一点も惡德といふ處が有りましやう。

ことに吾々が言はずとも、比較して男子より精神の鋭敏な女子に於て此嫉妬心も必ずまた比較して多いとは古來からして認めた處、もしも此認めが誤まって居るなら無難。よしや誤まったとしても女子に全く嫉妬心が無いとは元より以て言へた論では無し、これ有ると認めを付けるに於て毛頭差支は無い事でしやう

一旦女學校に首をつき入れてそれら女生徒同士の間の固有をつらく見れば、必らず此嫉妬心が競爭場に於て一層の磨擦を受け、彼是の間やゝもすれば火花と爲って飛び、光りを爲って兇兇く事實は充分に見出だせることゝです。更に移って女紅場につれ、各種製造場の婦人工場につれて見ても同じ事實は必らず存する——其間嫉妬の種類に高下の相違は有るにもしろ。これらと只々共同に集まって競爭場の模様でも更に猶他の野廣い社會に就て見れば、彼處にも亦こゝにも、事々しく指を折るにも及ばぬ事でせう。そして此邊に存する嫉妬は果して善良な方と言へば、悲しくもさうでありません。むしろ惡性です。夫妻間に存する嫉妬、これらは嫉妬の中でもまだいゝ方の物、それすら惡く變る事の事實は屢々有る、まして他人ぞろひの、眼中べつに濃かな愛も無い處に出來る嫉妬、其惡性不德は言ふ迄でもありません。

以上の事實と見た處で、深く嫉妬の物となりを思へば、其利害の分量は何う有るにしろ、兎に角凡そ一口に嫉妬といふ嫉妬は概して極めて賤しい念慮と斷言してさしたる差支は無い事で、それから出る利益は百分の物の中二十分の利益が殘って居るといふだけ、これらして利を望むよりはむしろ害を去る方がそもそも却って望ましいです

印度男子の猛惡

印度の男子が妻に對する工合は甚だ猛惡なものです。彼等は婦人を壓制するのを知ッて助けるのを知らず、即ち婦人は男子に取ッての奴隷です。夜となく日と無く妻を壓制强迫し、いやしくも自由がましい所業を許さぬ、如何なる高貴の家でも何でも、妻たるものが幾らか夫の命令を用ゐぬ時は直に離別されるのです。良人の許可無くて外出した妻は印度の男子から見れバ無類の惡人で、人より一番おくれて物を食べぬ婦人は印度男子に取ッて無比の惡女です。情無い沙汰の限り、印度婦人が人から前に用ゐくいゝものは藥ばかり、即ち毒味をすることで、取りも直さず命から何から一切男子の自由なのです。初めての家へ行くのは許されぬ、窓から外を見る事も許されぬ、良人の不在の時に殘ッた妻は鳴物停止、遊山法度、寶玉を着けることも、美服を纏ふ事も出來ず、踊りは見られぬ、音樂は聞けず、珍らしい物は一切見られぬ、美食は出來ず、鏡を見られず、全く以て死人同樣に愼しまなければ放逐離縁は直の事です。

玉屑一函

人間の皮で全世界を包んだ物が即ち詩人（佛の小說家ヒくとる　ゆうご）。

戀ほどに人心を感化する敎師は無い（無名氏）。

愁歎即ち智識。深く悲しむ人は深く世を知る（英の詩人はいろん）。

世の中は考へる人に取ッての滑稽場、感ずる人に取ッての愁歎場（文章家ほるぽオる）。

愛らしい目で送る秋波、美色は只相手の目を樂しませる、心を得させるのは德バかり（詩人ぽオぷ）。

恩がへしは是非爲べきことで、之を望むのは不道理（小說家るウそオ）。

看客に愉快を與へて欺き、容易に天地の高尙な規摸を之に示するが眞正の美術家の腕前（政事家ばるく）。

私には友達も澤山有り、又それと親しくする。さり乍らどうかと云へバそれよりも讀書がよし、むしろ愉快な話をするよりもむしろ書を讀むのを好む（詩人ぽオぷ）。

小說大家の時計屋へやつた手紙

英國でちやアれす でイッけんすといへば一二を爭ふ小說の大家、それは言はずともですが、此人が時計屋へやつた手紙と近頃料らず新聞社が手に入れ倫敦日々新聞に掲載しました。いかにも珍らしいもの、而も例の筆癖、其文章も中々面白い事でそ。左に譯して出しました。

「拜啓、陳者過日掃除に差上げたる拙者の掛時計右は其後も壯健(差上げぬ以前も壯健に有之候)ありしが只時間を恐ろしく怠けて打ち申し候　斯くて內臟頗る苦しげなる樣子にて終に呼吸を引取り申し最早打たぬ相成り候。寂滅往生は時計に取りては宜しかるべけれど拙宅に取ては大に迷惑、何卒然るべき御店の人御差向下され、右時計の塞がりたる胸膈早速御開き下されたく候以上」

倫敦の煤

倫敦の一年中の煤の量、さて聞けば恐ろしいものです。倫敦にたまる煤は一年間で凡そ五万噸、その代金二十四万圓との事、さすがのお煤とも云はれぬもの、倫敦と音にひびいた大都だけの事は有ります。

五つ紋の羽織幷に羽織の古式

そろ〱流行しはじめたのが五つ紋の羽織です。是も復古熱の一部分でしやうが。一時は簡略々々と云ひ來つて三つ紋となり、一つ紋となり、無紋となり、兎に角紋の少ないのが流行し、從つて紋も小さい方が流行し　、それも一場の夢となりました。今はまた冴えかへッて五つ紋がぼつ〱と上流の貴婦人及び紳士の間に行はれはじめ、從ッて相伴ッて紋もやゝ大きくなりかけました。流行とは言ひながら妙なもの、之については吾々は別に今度の見込も立ちません。果してよく行はれるか、どうかは猶怪しく思はれます。

序で言ひます、あれ羽織は古へは禮服の上に着て、つまりは禮服を匿したもので、それ故無紋に限ッたです。紀文大盡がある大名の羽織を着たのを眞似、紋を付けた羽織をつくッて着た、それを聞いて大名が大に笑ひ、紀文も豪氣な男だが町人だけに物の作法を知らぬと言ッた事か有ッたとやら、兎に角それ故禮式には脫ぐべき物であッたので、今日も婦人服には其通りですが、男子服には反對のことになりました。是も時世によッて變はる風俗の常です。

燈前小話（二）

美妙齋主人

駒の物語（一）

思ひ出せば最早足掛け三年の前、駒と名づけた猫を失ひました。　生來生き物の好きな美妙の性質、虫だらうが鳥だらうが、馬だらうが、犬だらうが、朋友にしたかつたのが一種の癖で、乞食の生れがはりかと人に冷評される事さへ有りました。　子供の頃からしてそれ故虫、鳥、毛物、場合ひの許すかぎりは畜ひもして戯れた、思へばそれも夢うつゝの間、忘れもせぬ過ぐる明治十八年の九月八日、母の懐ろにあつて始めて山田の家の所有となつた子猫、即ち駒、その愛らしさはそれ迄許多幾度も畜つた猫の中の第一でした。　時は殘熱の意地わるく蒸す頃、母も猫は好きのことゝて約束した家からの使ひと待たれし、用達とついでに其家を尋ね、懐ろにして抱いて來れば、何の此奴、愛敬袋！ばつちりと薄衣の間から目を明いて人を見て、さはれば咽喉は既にごろ〳〵其處へ出して見れば如何なことと、小さいも小さい、これで育たうかと思はるゝほどの小さゝ。　今は紀念と殘る木地塗の烟草函、縱四寸横二寸五分の其函の上にたつぷりと乘れるくらゐの小さゝ。　腹はまだ赤肌で毛も生えぞ、親ねこの乳がそこでも形ばかりに行列して居るのも小間しやくれて坐ろにをかしく、親の乳の足りぬためか、瘦せ衰へて見る影もなく、あとには猫に取つて苦しい時候、蚤が背筋に巢をかまへて、痒がつて顫くあはれさ。　是でも活きて居るかと思はれるやう。　惡くすると踏みつぶしかねぬ、いゝや手で摑みつぶしかねないと灣泊な金魚でもいぢるやうな言ひ草、兎に角育てることに定めて、それ牛乳、それ肉汁。　毛並みな黑斑で、四足だけ白く、くつきりとして富士額で、毛はミじかく、何と名をつけやうと爭つて相談も容易に落着せず、其處へ落ち會つた近所の令孃も交つかへし半分の口から出任せ、額が富士ですから富士が宜しうムいます、いゝえ語呂がわるいわ玉と爲さいよ、いゝえ玉ぢや無い、いゝえ富士ぢや無い、玉、富士、富士、玉、フヤ、タシ、おはゝゝゝ。　果は祖母の發議で駒と決し、駒ちやんぞよと言つても肝心の相手は平氣なもの、食をねだつて口を耳まで。　おゝ食べたいのかと一家内が飛んだ御世辭ものになり、總立ちに爲つて一疋のまはりと珍らしさうに取り卷いて、不思議でも無いに「われ食べるよ」。　ヤッさモッさ、些氣狂ひじみた位の有り樣。　其賴み少なさうな、小さな、繊弱の姿、しかも人懷きのよさに誰も一入の可愛さを増し、夜は蚊に食はれるのがいとしさに祖母も蚊帳の中へ連れ込んで、蒲團の片隅を貸してやる仕儀。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其儘の花

其まゝの　かたらぬ花よ
ともすれば　吾も花には
白れんげ　玉には生いで
汚れたる　泥より清れ

滄浪の　澄むも濁るも
大隠の　山お入らぬも
柳下恵　思へと神か
火も狂へ、氷も湧き立て、

何おとぞ　俗をはなれて
世の中を　さまで厭ふか、
世のゟゞを　受けぬ心ぞ
浮れくもゝ　風情となせる

磊落と　粧ひ易し
謹愼と　學び得難し
サブライム　何れかまさる
煩悩の　風よ波のみ

小夜更けて　髑髏よぅとる
皮ひとへ　むけば涙も
淺ましや　飾りの上に
かの貴き　天命いかに、

醉ひしれて　終にとるんす
胸の火の　燃ゆるしるれる」
「世の中よ　道こそなけれ
奥山の　鹿れねいりに、

泥よ居て　月を見るこそ
同じ月　岸にて見るは
藍つぼに　落ちて染まらぬ
いかばかり　澄ませし胸ぞ、

網笠よ　無擔も腮は
一つ松　さはぞあらねぞ
なめくじの　銀糸をめづる
閉ぢ籠めて　うぐひすを聞く

美妙

涙ゟあ。
恥ぢて泣く。
泥に咲き、
色を吸ふ。

心にて
いとそれ有り。
汚されぞ。
風は風。

山に入る？
大詩人！
詩あまゟる。
月と見よ！

岩の涙、
波の岩。
波と岩？
噪ぐなり。

伽羅をおし。
血とぞなる。
飾まなま。
大詩人？

狂ひゟり。
胸やすし。
思ひ入る」
大詩人？

樂しけれ。
胸せまし。
こゞねかな。
柳下恵？

小町なり。
風川よし。
人なくて、
人は有り。

秋月明

明日香主人

峯にまりかせ　さゝげども、
離にをとな　まねゟども
更にしらくも　消え果てゝ、
みそらに月は　澄めるなり。
經がたく見ゆる　世の中と
かこちし人は　心から。
こがねの涙か　白かねの
海とみまがふ　田れもかあ。
月のあがめの　面白や、
身れまづしさも　打ちわすれ、
えばし眺めて　ころもでの
露けきことも　知らざりき。

秋夜（謡韻文）

明日香主人

見るかげも無く　落ちぶれて、
浮世のしほぞ　身にはしむ。
暮るゝ芭蕉のむらしぐれ、
夜寒のとこのきりぎりす。
醉は頬よりさめそめて、
愁は眉に　あつまれり、
ふる郷さして　吹くかぜに
まどの燈火　みだれつゝ。

オン　ゼ・メンクス、オヴ、ア、ビロナフル、リヴア（カーペンター作）

夏の川邊れれもしろや。
蘆間をくゞる水の聲。
しげみの小唄ふし妙に
汐みちくれば水もるく、
水にもたれてふゥ巴ふ旦。
扨も川邊のおもしろや。
盲氣もれもひゞづみ川、
流るゝさまは春よして、
金華うつれば日に匂ふ
末の望みはうウみ海。

美妙

輕くうごめくむら立ちの
それも樂しげ。あよ風の
調べ合はするさゞ波。
眠るか、浮くの、花ばちそ、
水の流れと人れ身れ
いつを定先ぬ盛衰れ……
たゞよふ様は秋のくれ。
波も夜半には黒く澄む。

ゼ　ローゼス　エランド（マケイ博士作）

言葉よ盡くせぬ心籠先て
語らで物言ふ戀れつかひ、
心とさとりて受けて笑顔、
形ちはしぼめ、やさしか心！

美妙

薔薇を贈りてそれと知らす。
忍べる思ひをかの人に。
枯れ行く迄もと胸おかざそ。
心と末までもとのまゝよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文學小言

文學者の腕前

新らしくて珍らしい物と親しく見せ、親しくて新らしく無い物を珍らしく見せる、これが文學者の腕前とは誰有らう英國小說の泰斗さッかれいの格言で、吾々が常に服する文句です。　世間凡百の人情、それも誰も持つ、但し文學者で無ければそれと現はして實体を示し得ぬ、此實体を示し得る事、即ち新らしく無いものを珍らしく見せる事です。之を示すに方ッては或は比較、或は形容、出來るだけ實相を示すに力める、即ち凡人が中々見られぬ珍しい處の物を極めてよく親しく見せるのです。　六つかしく言へても何の角のと哲學じみても來る、やさしく文學者の腕を言へば右さッかれいの言ッた言葉の上に出る格言は出來ませまい。

言語の進化

言語は時を逐て變化するもの、いよ〱變化すればいよいよ微細になるもの、即ちいよ〱進步するのです。國學主義の中の守舊家は徒らに古今言語の相違と見、一概に古語をいゝものと信じ、この進步を退化といふ。不道理な至りです。　古語なら雅、新語なら俗とは英雄崇拜流義の一擲の妄言でそ。

文辭の幻想

障子を室內から見れば古紙も光りに透いて新らしく見え、室外から見れば古紙は其儘古紙と見える、是でも凡俗の言ひ方でそ。　之を「內外で去年と今年とを分かく見せる」と言ふ、此風ならば美術的、かう言ふと何と無く品がよく聞える、あれと名づけて文辭の幻想と云ひます。　美文家は此幻想を起すに馴きて人なのです。　これらは特に詩歌韻文に於て一層の力の有るもの、文辭に志すべき人、あとに文辭を習練なる人のかならず心得るべき事です。

花おりよしき

藤廼屋ゆかり女

第一回

天地ハ萬物の大學校にして光陰ハ其實本なり又日天地ハ萬物の劇場にして光陰ハ其幕切なり又日天地は萬物の儕寓にして光陰は其本國へ歸る道あり凡天地に生する萬物中人間を以て最第一の役者とす然り而らは人間役者の等級と士農工商別われとも皆此の天地の大學校に立ち事々當日劇場居の幕開け其天然の大學校に卒業免狀を賜はりて未には穴へ歸る道日々夜々の幕戲は穴六ヶしの浮世あり

此の天地間の大儕寓と明間を借た一ト構へ本幕臣にて五千石餘の錄をうけ裕かに暮せし家柄なるが清瀨道直といふ人あり其子道行幼年より和漢洋の學を脩行し今ハ大學校を卒業して工學士となり近頃日本鐵道會社へ雇はれて橫濱在勤あるより同港宮崎町へ家を求め先父は東都に殘り住まはせ其身はかりを移し來て定まる妻もあらぬにや嗜める植物後園と今日も手入に雇はるゝ園丁屋半七鼻歌は常々氣輕滑稽家都々逸「遠く離れて會ひたい時ハ月が鏡となれバよいトン、、」道行「半公も浮れ出したネーしかし好聲ざ眞金町の女が入あげるも無理もない「隨分月が鏡になるせー半七「へー旦那恐れ入ました月が鏡となるとハあんは開化の世の中でもナトむづかしうござんませう道行「ソーサー一月も鏡にする工夫がわるよそれより貴樣の都々逸がうまい最一トツやりたまへ半七「さう被仰られてハ半公閉口でございます道行「閉口する事があるものか唱歌のうち少し音調に合はないこゑが日本人ハ好むそれと猥褻な文句ハ有難ないが都々逸ハ理に適してゐる世の中を機械的として高尚な六ヶしい理屈や學者揃になつてしまつても野暮に面白くない猥褻のうちにも開所がある自分の心一トツデ、、、半七「ハ、、、、旦那方の理屈ハワッチ等にチットモ分りませんいつも御朋友方の御出の時ハなんだか政事だとか條約だとかなんとか六ヶ敷て肩が張ちまひやすそれよりや此の間御新宅祝の時ハ柳橋と芳町の姉さんたちが參て面白い事でした旦那ハ中々粹の通人誰な者にも御上手になさるさうかといつてれハらんもおかひなさらずでお茶やさり藝者にも好かれて手と出さず浮奧樣もなしそれでもなんでも出來なさる實に粹流れを高等に倚らず當世の交際家博士号でも差しあげる一條道行「イヤニ油とりけるなよを驕らうと話の聲ハ裏表清瀨が門邊に佇みつ表札を見て獨り默話く娘あり身にハ襤褸をまとへとも姿は春の柳の如く顔ハ芽立櫻花梅か香そへて愛嬌ある目鼻口こそ自から氣高樣子ハよしある人の種とも今ハ知る者な

き其境遇ぞとかなけれ手にさゝやかなる包携へ勝手へ廻り小障子戸を徐に開けて娘「御免わそばせ」下女「ハイどなた」娘「私ハ末吉町の山本から出ました先達ハ御めしを持てまゐりました母か上ります筈ですが不快でござんますから私が參りました母も宜敷申ました―下女「チヤ山本のおばさむの娘さんですか御苦勞さま日ざかりによく出かけておいでだネー毎度おかさむに御前さんのお咄しを聞てゐますそれかさんも仕合こんな美しい娘さんをもつてサーさぞ暑かつたらう冷い水がなるから顔でもお洗らひ今日ハ日曜で旦那さまもお内だから先達の勘定をもらつてあげるもつくり涼でおいで」此時奥より主人の道行水指携へ道行「チイ松や(下女の名)さつきつから呼で居るのに困るぢやないか下女「チヤ旦那樣此の子と話しに實かいつておよび遊したも存ませんで御免なそばせ(およし小使の名)ハおりませんか道行「今庭で掃除をしてゐる下女「左樣でございますか山本から御着物を持て參りました此の娘ハお安さんの子でござい升道行「さうのえおかさんの病氣ハよいかえ御苦勞だけネー暑りつたらうお休なお前幾年になる娘「ハイ十四でございます道行「名ハ娘「てると申ます道行「お照さんかへいゝ名ダコトおまへハ奉公に出ないの見「ハイ母の病氣がなほりましたら八王子へ機おりよ遣ると申てをります松「チヤ〳〵機おりおならないでもお前位の器量なら洋妾になつてごらん兩親ハ左り團扇照「へーおとつさんハそんなおとを申ますがおかさんハせひ私を機織にしるといひます私が生れた時にその事がしきてゐたとなんだかそんなはなしを聞ました―女「さうかえ道行「れ松や火鉢の引出しよ壹圓の銀貨がなるそれとお菓子を持て來ておくれ松「ハイ道行「おてるさんのうちハ末吉町何丁目照「九丁目でございます道行「さうかえ此の頭になそびに行よ照「アンナ汚なんとあろへど恥げに背けし顔ハいと〻猶一層美色を加へたを道行戀情と動かすとも知らぬおてるハおほこ氣に頻と歸さの急がれて照「モー參りまそ松「旦那樣これでござんますか道行「少し此のお菓子をもつてれんで金を上るから先達のぬひちんとえんな一所にさうして殘ハをかさんよ何か買てなげておくれ照「有がたうでさいますサヨーなら松「マー最少し涼しくなつてお歸りなー照「母がまつてをりますから道行「また遊ぶおんで照「ハイと禮儀もしとやかに門戸開けて出行たり

松「よい子でおさいまそ道行「わんなよしてれくハをしいものだおつくりをしるら別品になるだらう松「めつたにわれくらゐの別品ハなりません父か惡者ですからどうせ唯ハおきますまい道行「かわいさうだから貰て女房にしやうか松「なあたも物好じやなござせんかなんぼ好嬢でも親が惡うござんますものいくらも大家のらおもらひなさる事ができます先達御隠居樣(道行か父あり)がおんでになりまして從妹のおけいさまをお見合せなさると申ておいでなさんましたなこの不承知をおしやるから困ると心配としておんで遊します道行「なに不承知ではないが色々都合があるからおけいさんも能娘だ―松「御器量ハ今の照程でハなりますまいが學問やら御仕事までも女の藝ハよく勝れて入らしやんますしそれよ靜な御性質でおから服部樣とハよん御夫婦それにあなたが厭とおしやるはお氣がしれません道行「お前ハなか〳〵物識りだ―併し親類から貰うともかく苦情がなる照のやうな困る娘を貰て充分教育をしてから女房にすると面倒かすくない松「インヘイケませんよ學文をおしてみなさる内にお子樣でも仕込でおしまひなさるでせうナホ、道行「そんな不都合ハしなんよ松「ナンダか六ケしさうでございます道行「ナニ人を敎育するのハ社會のためサー松「そんなら私にも道行「おまへハ机よむかへハ居眠バかりするぢやないか松「またそんな恥を仰しやるホンお御母さまハ御存生中かられつき申て居ますから旦那樣を御友だちのやうにおもひまして年甲斐もないモー御風呂が湧きましたらうおのげんを見ませう道行「チヤ六時ダ―今夜ハ上村と約束しておいたけ「東京でございませうか道行「ナニグランドホテルヘ送別に行のサー此の時植木や勝手へ來たり半七「旦那先程の月か鏡に成とハ一躰どういふ理屈でおざいます道行「月の世界といつて世界があるのよ半七「それハ聞かぢつてゐますが天よあるのでもか道行「月ハ天にあるもんだから半七「ヘーデモ地球お廻りハ上か下かわかりませむ道行「其樣もなう〳〵理屈家ダ―松「旦那樣お風呂が宜しうございます半七「チイ半七一杯呑で待てゐるがれ〳〵湯よ入てくるから半七「有がたうございますなだか月の世界ハ畑のやうよおもはれます道行「さうよ滅たな別る事ではないおよしや燗をつけてやりなーと辭殘して立行ぬ

第二回

前面ハ渺茫たる池沼あり後面ハ堀割にて舟運の便よき片側町よ其名さへ末吉町とハ賴母しけれ併ぶ家むねも曾根の板軒は塲末れ家住居怪敷までよおところにも月もる壁に吹入るゝ風にもえ立蚊遣火の影も淋しき詫ずまひ是ぞ山本掛九郎が娘おてる母お安三入細々煙さへ今ハあう〳〵上げかぬる母のお安ハ此の程より持病の癪に打臥して積る苦勞の一時に發し枕も得わけぞ日々よ細すくなき有様を娘おてるは甲斐々しく夜の目合さぬ看病に晝ハ洗濯針仕事纔お細き賃錢に藥をなにくき調へて孝養怠たりなきよ引換父掛九郎ハ堵を好き妻の病苦は見む

きもせず乏しきおかの儲を貪り酒と堵に余念なき不善の行ひ多かりける

今もえ立し蚊遣火にお安ハ漸く起上りふたり見まもりし 安「おてる〱 照「アイお目がさめましたか先程仕立物を持て參ましたら淸瀨の且那樣が此お金とお菓子を下されましたよくおよつてゐらしやいましたから御目がさめるをまちましたが少し菓子をめしあがれ 安「そんなら淸瀨さまへお出かあの內れ且那樣は誠によくお氣がつきます昔ハ私れおとつさんお前しよいお祖父さんが御奉公申たお旗本のお家柄今でも御愛顧にして此の貧苦を見ついで下さる大事の且那樣それはさうと着物をれかへておいでかえ 照「それでもゐれハ 安「まだなぼかえ 照「此の間おとつさんが負たといつて持ておいでなさいましたー 安「おとつさんにも困るよ昔しもあんな人ぢやなかつたが打て變りた今の不身持なんと因果か罰でもあたッたれだらうかてゝ加へて私迄持病に苦しむ親子の薄命年端も由かぬお前よまで苦勞とかける氣の毒サー 照「おかさんそんなに御案事あさいますなせい出してれ藥をわがつて快なりて下さい私はかね〱おはなしの機織になつておかさんにらくをさせます今ハ學文技藝さへあれバ女でも立派に出世が出來るのですから私も技術を覺えて日本織物の改良をします 安「お前ハ大層むづかしい事を覺えたねー誰よそんなことと聞たえ尤一年ャ二年ハ學校へもやりしが其後ハ此の貧苦で習はせもせずどうして手紙や本を讀む樣になつたかと不思議であらん先達てから聞て見やうとおもつてゐたの 照「ハイ橫町の橋本の別莊よお嬢さんがおいでゞせうあれ方よ一昨年から間がある時ハお敎へていたゞきましたそしておかさんが御病氣でおいでなさるからとお嬢さんがいろ〱あものを下さいまそ 安「さうかえいつかお禮を申たんはんにおまへハ親の私さへ恥かしい心おけ人あゑなら今頃ハ東京の學校へやつて勉強させる盛りまヽになならあんハ世のならいなか〱立派に敎育してさへ覺あい者もある敎へあいでも何事も弁へる丈の才機があるお前ハ親が敎育することもあらないとハ浮世ハかうしたものか 照「れかさんが子の自慢人から聞くて笑ひます私ハなんにも知ゑれしませんよそれよりなんか此のおかねでかつてあげませう 照「私ハなんよもほしくないからお前の着物でもおきなさいおとつさんよ見せないやうにおしよと咄し半場へ歸り來る父勘九郎闘立縞の單物結ぶ三尺八反も一ト癖あるべきつら魂ゐたり見まはし大あぐら 勘「コー お照日暮方ふ飯こしらへもせず又おふくろとこそ〱咄し早膳を持て來んお安今日淸瀨からとつて來た金を出せ 安「今日ハ且那樣が留守でもらはなか

つたー 勘「エーいゝ加減あ人を馬鹿にしやがれ淸瀨から壹圓來たを表で立て聞てゐたお照さうだらう 照「インヘ 勘「こいつお婦くろと一緒になつてこれよくきゝよ此の間も洋妾にあれといへれいやだとぬかすなんでも機おりになりたいといふから十年きめでいけといへバおふくろが病氣だから直ッてからと勝手な事バかり貴樣ぐらゐの器量をもつて機おりよして猫るもれか此の間東京の金持の隱居が拾五六れ妾がほしいといつて尋ねて來たし機やへ行ないでその方へやるからさうお思てゐろ厭だとぬかしやコーだぞ煙管とりあげ打たんとそつて其手とおさへて 安「お前さん勘九郎さんそんなことをなすつて疵でもついたらどうなさるお照ハ私の子といへもと正せバ御主人の娘世ゝ代であれバ今時分學問諸藝をしてこそ盤子細あつて貳百圓といふお金とつけて三ッの時親しらずにおもらひ申て其お金を元手に馬車道で唐物店を開き始めハ家業も手廣になつたもお前さんが不度手と相塲に出したバかりわづか內に見せをえまひ親子が此の貧苦に落いつたをそれにもこりずお前さんれ身持酒と堵博に魂奪ハれ娘と相手に細々と由づうバかまの賃仕事その金迄もとりあげて盃か來てもお照にさへ着物一枚こしらへてやることもできずいまだその上に此のなつに夜ハ蚊張をつらないからおてるハ寐ゑにあはんでくれる心ざし孝々すぎてもつたいない御恩よなつた御主人れ御姬樣ぢやございませんかマー考てごらんなさいどうぞ今から身持ちをなほし善心よなつて下さい手と合せくたのゝまそかきくときたる母親の淚に焚さす蚊屋り火もしめり消なむ斗なり

勘「おやすそれで口說ハすむだのかなんぞといふとおてるかハ主人れ娘二百兩の金と盲の緣切の貳百兩ハやすいもの三ッから十四迄養育したハなか〱容易なものぢやないこれから金箱藝者よしようが賣らうが親のまゝそれハさうとさつきの壹圓とだしてくれ 安「壹圓ハおろか壹錢もありません 勘「エーうねまざそんしらと切りやがると腹立まぎれよ足蹴にしたとけかへそはづみよ急所を打けむウムーとバかりに女房ハ絶息せしてそむさんなれ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

寄書

工學士大竹みどり先生に呈す　　秋水樓主人（イ之）

御高名のみは豫ねて承はり居ることながら、玉稿と拜見したのハ實ゐ本月三日發行の少年園第五十五號が始でした。玉稿ハ彼の有名なサウジー氏の作になつた「ブレンハイムの戰爭」の韻文で、しかも矢田部其他二三の先生方が發明なされてから、久しく中絶して今では殆んど知る人も無い位になつた新体詩に譯されたお手際ハ實に敬服の外ハ有りません。

全体此の韻文の文字は比較的に容易な爲め——これハ私ばかりの觀念かも知れませんが——兎に角これまで讀んだことも有りました。が、分らぬところは隨分有りながら終ひそれなりで過しました。で、今先生の御譯稿を見れバ——無論——明瞭に了解することゝ難有拜讀いたしました。が、不思議なことも有れバ有るものです。何うも私には……。分らぬといふのとつまり自分が未熟な故と重ねて再三拜讀しました。で、其結果と遂ひに私を有邪無邪の境界に立至らせました。先生！何うぞ一言愚人に御教誨なさつて下さい。

第一曲——（第一）此曲でも「暫時眺めて居たりけり」の句の出どころか分りません。まさか坐つて居（was sitting）のから取つたのでは有りますまいが、此他にも「かすばァ」の主格に對する働詞が有りません。で、御譯稿には「坐せる」といふ言葉が表れて居ません。これハ如何のものですか？（第二）第五句の終の草地（green）といふ語が御譯稿に見えませんでしたが、この位の語ハ捨てゝも構ひませんか？或ハ此語の無いため孫娘が草地の上に居ることが讀者に知れ兼ねは爲ないでしやうか？「家の戶の外」だからとて強ち草茫々として居るとも限りますまい。ならば此語も必要では無いでそか？（第三）cottage を家となさつたのも如何なものでしやう？たゞ家とばかりでハ市中の家との區別が見えますまい。やはりこれハ小舍とか草屋とか譯さなければならぬのでは有りませんか？

第二曲——此曲は私の思つて居たのと大分違ひますから先づ先生の御譯稿を左に轉載しましやう。

　折しも弟のペートルが　大きく圓き物持て
　走り來りて問けるは　「小川の岸にて見出さる
　此物やなに滑らかな　大きく圓き物や何」

私も思ふ通りを散文に譯して見ました。——

娘は圓い物と轉して居た弟のびィたァきんと眼を止めましㄙ。弟の弄んで居る物は弟が小川の邊で見出した者でした。弟も自分の見出した物を問ねに來たのです。その物はいかにも大きく、滑らかでそして圓うムいました。

右の通りに兩方並べて見ると——無論私の方に間違が有るのでしやうが——何にしても大した違ひが有ります。先生の御解釋を以て、何うぞ私の迷雲を拂つて下さいㄙ。

第三曲——（第一）此曲の第二句「立つて居た」といふびィたァきんの擧動が御譯稿には見えませんが、この位の句は無くしても宜いのですか？（第二）かすばァは頭を振つてから歎息したやうに見受ますが、「思はず吐息つく〳〵と頭とうちふりて」となされては逆になりハ致しませんか？（第三）此疑問とこれまでも分らないで居た一つで、即ち poor fellow 譯語ですか、たゞ「人」とバかりではまだ私の疑は解けません。何うぞ委しい御解釋を願ひます。

第四曲——（第一）原文の第一句と第二句を蚤取眼で捜しても、さて「屡」の語ハ見當りません。たゞ見當らないばかりで無く此處に一の疑問が湧きました。といふのハ他でも有りません。原文には花園へ行けバ何時でも髑髏を見られるといふ意と含めて有ると思つたのに先生も「吾も屡花園にて之を見出す事ぞある」と御譯しになつて、全く私の考と相違しました。先生ハ原文の第二句即ち「此邊にハ澤山あるから」の句を冷淡に見られたのでハ有りませんか？（第二）「堀り出す事もあるぞかし」と御譯しなさつた先生の句ハ原文の中で「鋤の頭が髑髏を堀出せ」として有つた句でしやうが、これを等ハ散文と違つて如何のものですか？或ハ原作者をして地下で恨ましハ致しますまいか？

第五曲——（第一）私も適當の譯語を附け得ませんが wonder wating eyes で見上げると云ふ原文を「翁の顔をうちまもり」だけで滿足が出來ましやうか？（第二）原文の第五句ハ乙女子の疑問の一個條ですが、先生ハ終に略されました。いかにも弟の疑問とよく似て居るところから、或ハ文勢で略すことが出來るかも知れませんが、てにぞん翁の韻文ハ此の心を持つてしたら何うでしやう？

第七曲——（第一）「餘義無く遁れなければならぬ樣になりました」と原文にハ有つて、先生のにハ有りません。しかし、此句の有る爲めに翁ハ父が卑怯で逃げたで無いことが知れましやう。いや、卑怯で有つたかもしれません。卑怯で有つたなら猶更必要だと思ひます。子として親の非を隱し

たいれハ人情として有る道理。まして自分の子供に自分の親の話をするのですもの、幾分か慾目が無くてはならぬのでしやう。それらの情實を表はすにしても前の一句が是非入用では無いですか？（第二）善くも知りませんが、何處へ落着かうと云ふ當途も無く」といふ原文の結句は何うなされました？（第三）筆の序に言ひますが何の爲めに此邊の主と客とを取り替へられたのですか？

第八曲——始めの二句の譯は韻文として如何のものでしやう？　無論「刀に斬られ火に燒かれ」たには違ひ有りませんか「火と劍が此國を周り歩いて、あちらこちらを荒らした」といふ原文もいづれでしやう？

第十曲——（第一）此曲で御教示を願ひ度いのは「……」です。これには果して何ういふ意味が有るのですか？　言文一致体の文などに用ひるのとは無論違ひましやうが、父の言葉の終りと娘の言葉の始めを「……」で結ばれたのは私ハ此世へ生れてから十幾年日で始めて拜見しました。何うぞ御教誨を願ひます。（第二）乙女の言葉を「惡しき事して何故に」とハ如何なる思召が有つて爲さつたことか知れませんが、原文ハ「おやまア酷い事ね！」位の意味では有りませんか？　失禮な言分ながら、もし先生 why の字義を誤まつたので無いですう？　いや、先生ハ既に大學を終へたお方、何うして此位の字を讀み違へる事がありましやう。何うも私よハなしよなる第四讀本の二十五頁第三行幷に第二十四行目に有るのと同じことで、how 或ん well 等のやうに深い意味の無い字としか思へません。

右ハ原文十一曲六十六句に對して、隨分少なくも無い質問ですが、これに對する先生の御答へ——實に私どかりて無く——天下幾万人の後學者の益になること。たゞそれより免じて慾何うぞ——先生の大度を以て——御叱り下さいますな。を言へば際限の無いことながら、言ひたいとハ口の先まで出ながら筆の奴が動いて呉れません。全く幾万人の代表者としてハまだ／＼少ない疑問でしやうが、先生の御心でこれハ必要だと思召すことが有りましたなら、それも併せてお述べ下さい。骨厳を瀆もの罪と文字の失禮よ渡つたところハ末筆ながら幾重よもお佗致します。　明治廿四年二月七日秋水

謹言。

變化せき

盬澤庄吉

解嘲と言ふ譯でもありませんがまゝ子樣から「いつの間にの言文一致せきと變られしよな」といふ御言葉と頂戴したについて一寸述べます私しとても生れつきの言文一致好きでハありませんそれか何ぞや私しが日本の少年へ投書しことがあつたのを證として……そも何の必要あつていらつめの紙上よよつてかゝるとを御言遣る？……妙な御方よ！……私しが言文一致すきとなつたのハ去々廿二年の頃からでもなく一昨々廿壹年倘小學生徒であつたころ先生から古い下野教育雜誌を拜借して讀むと佐藤豊之輔といふ御方が言文一致の必用を說かれたものを見出しましたその文には大きよ私しは感動したれですそきから段々小心にも（大膽ながら）言文一致で自分で書くといふとを考へなかつたが（ぞうせ出來ないか）言文一致れ必要を說いたり擴張の方法なぞを考へた非頭考へたのでハ先づ／＼日本全体の言語を完全な言語に一定したいそれおも急劇には出來んから小學校の教師さま方に於て讀書作文（其他の時間にもですが）の教授れ際に生徒の言語も矯正してもらひたいといつたのでしたしりし必要と感じて居たもの、其頃書いた文章は皆假名交りですすでに言文一致の必要を說いふ論なども假名交り文で書いた（新聞も雜誌も憐れよも載せて呉れませんかつたが）今も文庫の底よあります去々十一月の頃なぞはほんの小供業ぞうして言文一致で書く勇氣がありましたらう……「言文一致が私しの主義といふ方樣と命かけて言文一致を守りたいといふ娘樣とが味方打をして何とすると洒ふとは……アモ冷淡な！……何事！冷笑三昧！……

……　明治辛卯二月十一日下野國芳賀郡七井村　盬澤庄吉

去年の名作

先ノまゝ子、

去年我一小說を讀ミ。先づ此が此年の名作あらんと思ひ、其頃忍月樣が此を閨秀の二妙の一よ置かれしも、我ハ未だ不滿足なりき。其より年末に至り、方々が最も目を付けし他の數種と校べしかど、倘は此に優るのを得ざりけれバ自劣たうましが、折柄、不知庵樣が此を最傑出の作い言ハれしよ依り、我殊更よ思詰め、他樣れとながら嬉しく。愈々此が此年の名作と思定めぬ。　抑々此とハ。巖本えづ子樣の（忘れ形見）なり。倘し。何点に其程の見所がなるぞと裏問ひたまふ方あれバ。兎に角、厭でも一度ハ讀ミたまへと我ハ言ふ。此頃我感冒を引込み、牀れ中に在りても、種々のとを思出すにつけ、好きな小說の話とて、此日些しく氣分快けれバ、去年の名作を疑ふ方の爲めよとて、一筆染むると如件。（紀元節）

盬澤庄吉

再び三坂孃へ

前置きが長いと諸孃に欠伸を呈するやうな譯で失敬でもありますから——前略御免下さいませ——……さて私しが六九号で述べた意見から私しと貴孃とれ間に意見の行違ひの出來ましたのハ左の五項で御座いましやう（尤も

新字よついてハ行違つた譯もあいたゝ項目ヶ擧げたのです）
㈠文章の一定しないのハ文學れ一定しあいれであるといふ
ても差支ない位と言つたと㈡今日世間にある言文一致文ハ
二三の名家を除く外見るに見られないと言つたと㈢如何に
不束な語で書いてもそれハいゝんと言ふとが出來ないと言
つたと㈣一大語典を編みたいと言つたと㈤新字をこしらひ
たいと言つたと

右の通りで私しの論れ骨髓といぬ所ハ日本文章を一定しさい
‖によつてハ日本惟一の文章とすべき資格ある言文一致を擴
張したい完全よしたい‖によつてハ一大語典を編成したい及新
字をこしらひたいといふのでした其他の文字ハ皆こゝよ論及
するまでの手段とし方便として書いたのでした──のら第一
こゝへ──固より頑愚で粗忽で（これハ實に私しを評するよ
適して居るのです）文るどにハ慣れない奴些細あとハ大目に
見て下さい此段前以て……さて追次一條づゝ述べさしやう
㈠──あれハ前にも言つた通り實に失言でしさ〜文字外に深
い意味が有つたといのと」とか仰せ……ハゝ……私しも文
學者ですな！……文字外に意味を持たせるなんて……しかし
文字から類がつて前にも後にもちつとも意味ハ……ないから失
策……イヤ御笑ひなさるな思つさとが文字に顯はれない！
ア、未熟殘念！なぜかうも貴孃の御掛念を煩はすか……エこ
れは御掛念下さるな……即ち失策ですから……「文學の一定
しないのであると言ふても差支ない位」との二十二字を書か
なかつさ字だと思つて下され……なぜならはないとしても私
しの論に異同を生じないから……といふものゝ一旦言つた
とを反古よしたれ譯もないでも言ひやうの惡かつたのは惡か
つたやう言つさ精神ハ精神だけ述ぶる積りです先づ前々回に
言つた私しの言でハ「文學の流義を一定したい精神」と御判斷
かとも存じましたのでも──貴孃もそでなかつたのでしやふが
──私しの意見では文章が一定しないではヂッケンス派はヂッ
ケンスカーライル派はカーライル又西鶴派は西鶴其頑派は其
頑馬琴派は馬琴自個流も自個流と井然と親ひ惡い位いといふ
やうな積りで「文章が亂れて居ても文學に種類があるやうな」
と言ふたのも「文學の性質が解らなんやうな」と言ふたのも全
く冠詞を被らせるを迂濶に忘たので即ち文學の二字へ日本と
か西洋とかの冠詞を被らせるとでしただらう「体裁が一定し
ない」と言つたのも体裁が一定しないので餅なら（先回パンに
例したから）餅パンならパンと文學の種類が一定しないとい
ふ譯でもありませんたとへバ体裁が──三角から三角と──同じ
でも種類が──パンや羊かん或は餅なぞ〳〵──違つて居る──即ち

文章も同じでも文學の種類が違つて居る──其種類を一定しや
う迄にも言及ばさなかつた精神です私は實に不文でそして
精神が單一ですからついに御疑念を煩はす様な書き様をしまし
て……言文一致は實に發行中古以來のいらつめかと美妙先
生の小說類で許り稽古したですから實に貴孃の文章などには
私しも大きな裨益と蒙つたのですそれゆゑ貴孃などは私しの
先入ですどうか……それだけに思召して……追條のつまらぬ
辨論……充分御教授を…………
㈡──「見るに見られない」と私しが言つたれを御駁しなされ
た辨護として私しが前回に述べましたのと何の御肝臟に障つ
たこと、見ねて（失敬な語氣ですが）「痛くない腹を探られた
やうな心地もしました」との仰せ……格別私の方では探つた
積りもありませんが？……しかし私しが「二三名家を除く
外は云々」と言つたのも煎じ詰めれば御同感だとのこと「餘り
貶黜しては」……「同志の志氣を沮喪するに餘りある鋭い言葉」
とれ御論じ流石に論じ甲斐のある御論じやう！ですがどうせ
私しの言つたことなどで志を挫くやうな方は萬々これあい
とゝ信じます尤も普通奨勵の語として不都合かも知れません
が私しだけの‖言文一致について‖の意見‖と論じるについて
慷慨の文字かとも存じて‖つまりは奬勵文字と思つて‖用ゐ
たけみで惡いと御言遣らるゝなら望しいとしましやう前回の
御言葉でも「御貶黜」滿足を望むのは實難いとで」との御講釋「
ゆゑ章魚の足れそふな長ん許りて骨のない辨護もしました「
痛くない腹を探られたなど〳〵も……なる程私しが言はどても百
も御承知二百も御合点で……どうぞ痛いなど〳〵は……
㈢──「其筈日本語は錯雜」云々より「いけんとれふとが出來
ない」までを表面より裏面よりよく〳〵御察し下さい……漢
文や和文へ「です」「でした」といふやふな捨假名をしてそれで
吾しは言文一致を書きましたと鼻うごめかして居るものがあ
りますか？──論じやうにも程がある──「御坐んせん」「御坐
いません」「御座イヤそ」「御座りません」孰れが本當？孰れが
本當？私しは關東者ですから「御座んせん」と書きたいのを枉
げて「御座いません」と書くれですが平常の言葉でも「御座ん
せん」としか〳〵出ません…………「いかに不束な語で云
々」と言つたのも知れぬ〳〵に出たのそでなければそうして
も指定地方の言葉が出ないで自分の地方そでなければ他の地
方の言葉を用ゐたのを指したので……即ち某等れ言葉がいう
に不束な語でもと言つたのです態と用ゐた不束な語……そを
とつて惡いといふとが出來るとの御こなし余り好論家の言の
やうに聞へはしませんか？！そんならこゝに一つの言文一致

文がなる（よくても惡くても）あの文がそこでよいそこで惡いといふ詳細な鑑定が出來ますか？私しの考へでは

言語 ―― こういふ言語といふものと
言文一致 ―― 語格 文法 ―― こういふ言文一致と

いふキッカリとしたものがなりたら即ち言語といふ範圍と言文一致といふ文章の制定がわりましたら惡るいといふども出來ると存じます……がしかし普通文法といふものは勢はひきまつて居る言語といふものゝ大抵きまつて居る……普通の條理によつてい、惡るいは大概れところゝ誰が見ても解る……言ひる……が惡るいとキツカリと證據立るあとの出來るものは？ア、わりますまい！言文一致の標準とすべきもれてハ？ア、なるまい！杜撰に言語と用ゐるのハ言語れうち交つて居る爲め「その道理或る手段を以つて矯正の策とらなければならない」との御言葉いかなも行違ひの出來べき筈がないのに「思ひ直はされぬ」と言つたれハ私しのしくじり業……次よ私しが言文一致に用ゐるべき言語ハ極りて居ますかと問ひましたのに「固〳〵極つて居ません」との御答ひ極りて居なくては……即ちどんな不束な語を用ゐて＝成る程度を超えなければ＝書いても惡いとは曰はれますまい？御例論がありましたが私し共にも分らぬて……例之は「貴孃の文章は言文一致に用ゐてはならない言語を用ゐたから「惡い」との詰問に對しまして「そんなら言文一致に用ゐるべき言語の範圍外だといふと御證明？」と答辨せられたら――貴孃が假りに詰問者となつて――そうです？東京地方の言葉でも「さうざますよ」「そふですよ」「そふさアね」（下のは上の二とも何分か意味が違ふが！點の意味を持つて居るから）といふ三つでどれを使つてもい、の？勿論普通の語を取れバ……でそか……「口から出任に書いては惡い」との御論に言ふまでもないと出任に書いては……丁度上の方で述べたと同じで……しかし極端な論をした迚詮のないと「口から出任せに書く」なんて飛んでもない！「何にも構はせ書いたんでは一般に通じぬ」「効益のない言文一致よもや御滿足はなさりますまい」との仰せ御尤もだが滿足だと言ひましたか？（この御言葉許りは不論に致しましやう）そんな不束な語で書いてもいけんといふが出來ないやうで困つた者だと言つたのです言文一致を擴張するの手段完成の方法として最大必要重なる効用をなすべき第一着手の語典と編成する方法研究しなくては（たとひ其他の方便と攻究しても）言文致一も講釋筆記演說筆記のやふなつて詮がないではわりませんか……況して地方よは全ゝ眞正優美な言語が理れて居るではありませんか？「夫から日本語としていゝか惡るいか譯らんものがわる」と言つたのも同意味異音の語が二以上あるとそれバ其一若くし數を指したのです「だがしかし」から「お星程もなりますまい」が解りにならないとの仰せそうも……イヤ御尤もです仰に隨つて申しますれバ私しが文字から解釋していけど御說のそんな文体で書いてもいけんと言ふとが出來ないとなるのも有ましやう所し貴孃の言つたいけんと言ふとが出來るといふた理由を裏面から――精神から――解釋すれどこれもいかんあれもいけんと言はなくてとならないやうになり行くい、と曰ふべきものは曉方の星のやうに少なからうと言つたのです（私しが筆が辷りて論理よあてはめたならばといつたので譯らないと御言遣る……大山は土壤と讓らないとか……流石は貴孃だけ……）

（四）――あついては大した勿体ない御言葉ェ……恥しい……語典編纂は今度は御贊成下さるとの御言葉……ア、嬉しい！……別に改まつた言葉を用ゐません御推察下さい……然しそうした譯やら私しは今回御書きなされた筆法は恰んど腦髓がかしき亂れて！……「先回の御論では神聖寧ろ奇怪な勢力を持つた字書としか思ひませなんだ」と仰つた理由として下に「言語を調べて其言語で文章を書くとかいよ使はんければならんのハ矢張り之れと日本語とする（中略）其やうなものは出來やう筈もなし」と御言遣りました「其やうなものゝ出來やう筈もなし」と御言遣つた基礎は何んです？是非御論しと……言語を調べてそして語典を拵へるそして文章と書くよは其語典の中の語を標準とすることがどうして奇怪な勢力を持て居る語典？何にも孫悟空の神通力のやふな譯もありません……勿論其言語の範圍内で書くといふ命令詞は下しません其語典と標準所謂的とせいといふのです（幾多の經驗の後完全な語典となつたれバ）煎じ詰めれど言文一致の的ですこれまでれやうな漠とした標準でなくしたいといふので尙は語を變へて言へバつまり〳〵世間の文章家が語典は範圍内で書くやうに勢はひ成り行くやうにしたいのです今度語典編纂を御贊成の原因として「出來ないとか報償價値がないとか言ふたのは全く別問題に就ての話」となりました根本としては「先のは字言で今度れは語典だとのこと」と御言遣られました……別問題だから贊成が出來なかつたのだなぜなれば字書といふ目論見でわつるからといふ御意見でしやうがどうして別問題と御判定？字書と語典いふにも違ひますが先沈に私しは述べたのも語典の積りで述へたのですから前後と御熟讀なすつたら御推察で御坐いましたらうし美妙先生の御直しなすつたのでも御解

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

まで御坐いませぬとはいふものゝこれは我儘な言ひ分一体全体私しの書きやふが惡かつた爲め貴孃の御叱りを起したのはまことと相濟まない儀で御坐いました「前回の御說と矣れ御說に對した意見とを更に御味ひ下さいませ」との抑せ御尤もと存じ隨分繰り返しく\見ましたがどうも「文學の進路と杜絕する」と御言遣た理由が悟れません（尤も別問題といふ御言葉ですから其筈ですが）「何故前回では却つて秩序を破るやうな形跡のある御文でありましたとか」と御言遣つたのもこれも譯りません……絞り切つて言つて見ますれば私しの前々回に言つたとも前回に言つたとも一致して居る積り――其精神と（字典と語典の差はあつても）――しかし私しが書き違つた罪科であのやうな行違ひ重々恐れ入ります……御贊成ではいりませんからこゝ一寸述べた置きます語典を編纂（語典の成立の分子ことうに言ひましたから略します）して（これに隨つて語格文典も編まれればなりません）それと――一致の源泉とも標準ともしたいのですそして目下の効益としては（遠からぞ見さい）一定の言語を蔓延したり其言語を轉訛させず言文一致を制定したりして即ち言文共に完全にしたいといふのでぞ其他後々に見るべき効益は擧げずとも……愚案はかうです……御贊成下さるならば斯の道の爲めどうぞ充分御盡力下さい……

本來㈢三のところで述べるのでしたコンモンセンス……御文どうしても出來んと申しては御耻しいのみか金玉の御文爲めに解せないヶ所があつては遺憾と存じ郵便で友人微笑子に問合せた所そくに答へられましたからやうやく解りました――あれがためどんなに苦しう御坐いましたか――から御答へ申さなかつた一段落御答へ申すのでそが――あゝで申しませんでも大体㈢の所で答へ申した譯よ書かざりましたから――……

㈤――については「贊成とも不贊成ともまだ言はぬといふやふな御言葉「意見があつたら示せ」といふやふな仰せこの新字についてはいくらか意見のない私でもないですが何分まだ乳臭味のぬけない私ですから――年がとつてもだが――經驗とてもない故とても諸孃に御見せ申す程の考案もありません何れ調べにつたら美妙先生に御見せ申して通信問答欄内で先生の御批評を願つた幾分か見られる点もあつたら諸孃の高覽をなふぐと、言しませふ貴孃の「何とも」から「出ませふ」までの御見込私しも至極同感新字の必用を考へ始めた第一着点でしたあはれ斯道の爲め篤と御研究下さい……

そく〳〵さしいあとを書以て毎々御清讀を瀆しますのは恐れ多くありますがこれも熱心の余りと幾重にも御勘弁下さつて迷つて居る所があつたら御解諭下さるやう毎度ながら願ひ上げます

（完）

通信問答

みやま――㈠應募諸孃は背影をいらつめに出す事ハ一寸難い事と思ひますから折角の御忠告ながら猶よく考へましやう㈡石橋忍月君と思案君とハ兄弟ではありません㈢九十九の嫗の作者ハ如何にも中西梅花氏です㈣饗庭篁村氏にハ如何にも仰やる位は令息もあります。令夫人同伴で氏が旅行した事も無くは有りませんから或ハ汽車中で御見掛けに為ッたのも同氏でしたらう㈤不知庵主人ハどこの生徒でも有りません、本名ハ内田貢氏㈥古河默阿彌翁の本名ハ吉村新七氏です㈦いらつめへ脚本掲載せる立花屋氏ハ如何にも仰せの通りの人です但しあまり本名の傳はるのを忌むためこゝにも本名を擧げません㈧饗庭氏の脚本太田道灌ハ實地劇場で演ずるつもりです實ハ舊臘演せるつもりでしたが少々差支が有ッて一時やめました。右の脚本ハ依田百川、森田思軒、山田美妙、須藤南翠古河默阿彌、關根正直、岡倉覺三、高田早苗、市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次抔其他日本演藝協會委員の諸氏に於て一々は賛評を經たものです㈨故工學博士岩谷立太郎氏ハ岩谷季雄氏は兄君です。

芳苑女史――㈠蜀麥の寒ざらし粉の酸味を呈したのハ蒸發氣が去り切れぬためでせう。打ち捨てゝ置けバ粉は腐敗するのです。早い内ならば日光と空氣によく中てゝおほせます㈡川崎花子孃のもと在らせた學校のたしかな處ハつひ存じませんでした。次号にハ同氏から通書次第御答へしましやう㈢香園女史は伊賀國住居の人、本名ハ笹川はる子、本年十七歳、一々女史ハ東京麹町區居住の人、本名ハ渡邊みね子、いづれも妙齢は令孃です㈣實地専用の加法ハ珠算の方が便利です既に先頃の新聞にも外人（英人）が大に我國の珠算の便に驚き専修生を派遣する事に決したと出て居ました㈤懸賞文藝に「何でもよし」とあるのは詩でも宜しいのです。

ＴＮ生――㈠美妙子が去年の改進新聞紙上に出された明治廛壇叢話のつゞきは事に因ッたらこれ雜誌に出しても宜しいでせう、多數の方が御望みならば㈡當今の若手文學者の中に何故無妻が多いかその子細ハ知りません㈢嵯峨屋氏の住所も失念しました㈣國民新聞紙上に湖處子が出した「山里」といふものハ韵文は形だけなしたもの、格調ハ無茶苦茶な物です。

田邊桑子――西洋人ハもとの肌が白いです。が、肉食したり、ゆるく究屈な衣服を着たりするため、いらつめ第七十六号に擧げたとほり油のため日に焼けるのが多いです。日本で俗に斯ういふ事を言ひます、顔に汗をかいたら直と洗ひ落す、かうして居れハ日にハ焼けぬと。是も右は理なのです油の中にハ脂が有る、それが焼けついて日に焼けさせるのです。身体の脂肪の分量ハ日本人とて中々有ることで、之に付加への脂こいものを食べて居ればいけぬとの事です。

秋篠かめ子――㈠巴旦杏ハいかにも肌をよくする良劑でせう㈡一番簡略な歯みがきハ木炭の粉です。で無ければ硼砂の粉です。そして此二つハ歯の爲にも宜しいです㈢烟草ハ烟草入に一度に澤山入れる故粉になり易いです。些し宛出して一々吸ひ盡くしてから又出せバ常に粉ハ無くて居ます。

てる子――御尋ねハ一寸面倒なものでしたが折よく參考の物が有りましたから委細御答へします。是ハ昨明治二十三年の一年間の平均統計で、極めて新らしい物で、此の値段を推せバ大抵今日も其邊の些し高い處で買へます。が、いづれもこゝに記したのハ原價です。――御召ちりめん一反五圓、薄羽織地一反二圓、上布一反二圓卅錢、縮緬帯地一反卅五圓、鳳折ちりめん一反四圓五十錢、壁ちりめん一反五圓二十錢、羽二重一反十圓、甲斐絹一反三圓五十錢、甲斐絹綾地大巾一反九圓五十錢、同紋織一反六圓、綾地肩掛一反十一圓、綾地羽二重九圓五十錢、大巾甲斐絹五圓、薄琥珀大巾十圓、新ちりめん一圓八十錢、安積ちりめん一圓三十錢、廣東ちゞみ一圓四十錢、旭ちゞみ一圓廿錢。

（以下次号）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

社告

文家的快樂と題せる文を當号に出す豫告れ處原稿の都合よより暫く見合はせ、其代り美妙齋主人の作よ係る「駒物語」の一端と當号で開きました。

神田一女生　右は本号掲載無名小説れ著者の處御宿所も御姓名も知れせ色々御面談も望ましい儘何卒御自筆で當社迄御報を願ひます。

寄書家各位!!!　原稿欝積のため自然各寄書家の玉稿其至急を要する物の外は遲く掲載する事なる段と幾重ふも御容赦願ひます

學校賞品　既ふ發兌せり

少年叢書 **本朝志立談**

定價金參拾錢　全國無送遞料

世ふ立志談名つくる書少からずと雖も、何きも西洋の事蹟を擧ぐるに過ぎずして、本邦れ事よ係るもれなし。是れ本邦よハ立志談を名づくべき事蹟なきに因るかといふよ、決して然るよならず、世人れ之を知らざるに在るのみ。此の書ハ本朝近世の文學、工業、技藝、殖産等に就て、或ハ一家を起し、或ハ一業と創め、勉強忍耐よくその素志を貫ぬきし人々逸事と集めたるものにして、少年子弟一たび之を閲讀するときハ、愉快の念蓬々として心頭よ生じ、感慨の情混々として腦裡より湧出し、遂よ思はず奮然案を打て蹶起するよ至るべし。初編掲ぐる所れ人名ハ左の如し。

河村瑞賢　濱田彌兵衛　山田長政　新井白石
芭蕉庵桃青　近松門左衛門　神澤其蜩　高橋東岡
伊能忠敬　曲亭馬琴　緑亭川柳　青木昆陽
平賀源内　中島藤右衛門　大久保主水
玉川庄右衛門附清右衛門　田中丘隅　那珂宗助
吉田雨岡　岩橋甚兵衛　北村雪山　伊藤若冲
森祖仙　司馬江漢　永田善吉

挿畫（五姓田芳柳氏畫）河村瑞賢沿海巡見圖、濱田彌兵衛國辱を雪ぐ、新井白石勤學の圖近松門左衛門の像、東岡夫婦問答の圖、曲亭馬琴の像、平賀源内れ像、神田上水の圖、那珂宗助兒童をし諸工事と助けしむ圖、雨岡大橋を架する圖、北村雪山盟の下に字を習ふ圖、淺草寺よて諸人錦帶橋の額面を賞する圖、

發兌　少年園出版部

●●●●●手ある者は繙け●●眼あるものは見よ●●●●●

俳諧 一日集

●當集は即本會の機關あり其要俳諧の大道を明よするにありて固より營利の目的に非されて費用れ少兇取扱懇なる全天下に其比無し●當集ハ未一回も休刊せる事なし●當集を知らさる者ハ眞正の俳人に非す●當集を讀まさる者は斯道の熱心家ふ非す●當集を見て驚かさる者ハ無心經の人也●當集と見て感せさる者ハ暗愚の小人也當集を侮る者ハ未俳諧の妙を知らさる者也●當集を誹る者ゝ己の及ゝさるを披露そる聾也●當集を嫌ふ者は斯道の進歩を妨害する徒也●當集を監督する者ハ會長泉々居穿井也●當集ハ連月一回發行そ●當集よ本會規律、會報、論説、俳談、講義、參考、新聲、追加、雜錄、本評、兼題、句合、詠史、互撰、互話、雜題、連句、餘興、廣告の諸欄あり●當集の見本ハ郵券四錢にて呈す

東京日本橋區蠣殼町二丁四番地　松風會本部

●●●●●口ある者ハ讀め●●耳あるものハ聞け●●●●●

教育

第四十三號　明治廿四年一月廿五日發行

目次

教育 新年ノ所感ヲ述ブ●子弟ノ教育ノ方針

學説 手工教諭●教授案内●地理學理論一班●技藝教授ノ必要ヲ論ス

文藝 詩●和歌●和文●漢文●

雜錄 國家教育ト國民教育トヲ混同スベカラズ●拿破崙一世の諸事談●西史一夕話●小學教育ニ關スル女子職務如何

雜報 明治廿四年●有邯無邯●官臭●教育上の民權家●上野教育會の意見●佐竹義和氏●學政報知●學事細則●本邦醫士の數●肺病療治の大發明●雜誌記者懇親會●牛に六十二の効用あり●肉食者は宜しく注意すへし●開明國人の獸行●飲禮廣告に就き●廣告

（一冊金七錢○半年分六冊前金三十八錢○一年分十二冊前金七十錢○毎冊郵税五厘○現金前金ニアラサレハ發送セス）

發行所　東京日本橋區村松町七番地　學海指針社

道之友第十一號目録

○會長伏見文秀女王殿下御詠
○名譽御員善光寺大本願久我尼公御詠
○論説●男性の好尙ハ女性の好尙如何ゟ關す……梅溪女史
○法話●眞宗高田派門跡御裏方御親話
○演説●廢娼論に就ての意見……岡無外
○小説●硬漢……露伴合著 麗水
○衛生●牛乳と鷄卵の断（接前）……（醫學士）梶田恭一郎
○學藝●阿佛尼庭の訓抄（接前）……關根正直
○雜録●内訓（承前、法城居士摘録）●貴女の芳言（承前、門水居士）●樂木屋物語
○文苑●（詩）題白衣觀音大士圖外一首（養鷗松翁）●新年所見外一首（日野珠堂）●（歌）道の友を祝ひ侍りて御一首（長瀬鏡子）●新年のこゝろをよめる（加藤はま子）●御歌會始れ御題を承りて（青木茂）●早梅（菱川慈光）●同髮度（加藤賢了）●みちのとも五文字を句の頭ゟ置て剃服部可笑翁）●（兼題甲部）新年……堀内浪枝子……杉本八重子……青木茂……加藤てい子……加藤晴月……加藤りむ子……鶴岡八重子……山田成子……菱川慈光……林鐐作……木原みや子……無法子……加藤はま子……富貴子……木原貞子……溝口うら子……長瀬鏡子●（兼題乙部）むつき一日もはりまりて寔する所……加藤久枝子……加藤りむ子……木原貞子……溝口うら子……無法子……
○雜報●新年●新年の差異●常宮殿下の御質素●宮中月並御歌會兼題●帝國議會の燒失●流行性感冒
○寄書●小兒敎育ゟ就て……岩尾昌弘
○團体記事○本會報告……○特別廣告……○廣告十數件

發行所 愛知縣名古屋市下茶屋町番外 佛教婦人會

（遞信省認可）

弊店義兼て歐米へ注文致置き候ピヤノ○ヲルガン○ヴァイヲリン○並ゟ歐米諸大家ノ音樂書籍數百種今回着荷致候に付き非常廉價にて販賣可致候間以一覽の上以購求被下度伏て是祈る和製ヲルガン義も近頃諸機械を設置し凡て歐米製と異なるなき品を製するに至れり

樂器着荷廣告

ピアノ○ヲルガン 貳拾圓以上百貳拾圓迄數種

○御深切に調律修繕可致候

東京市神田區通鍋町拾番地

高木商店

但雛形代價御入用の節ハ御ゆ越次弟直に郵送す

明治女學校女子職業部規則

○本部ハ女子に職業を敎授する所とす○本部に於て敎授する職業ハ裁縫。縫箔。圖繪三科とし各科の卒業を二年とす（但編物ハ各科生共隨意ゟ學バしむ）○本部ハ別に主計科（五ヶ月卒業）を置き簿記。筆算。用文。速記術に熟達せしめ書記主計の任に適せ可き婦人を養成し新聞社。會社。銀行。商店の雇聘に應するをと得しむ○本部普通生の外に兼修生を置き都合に依り二科以上を兼修するとを得しむ（殊ゟ他の學校生徒及家事を取る人の爲めに便利を謀る）○本部の授業時間を一日七時とし内二時間を讀書算術及修身上の講話ゟ充つ○授業料ハ普通生を一圓とし兼修生を其半額とす○入校を望むものハ年齡學力の定限と置かずと雖も品行方正ゟして必ぜ慥かなる保證人を立て束修金一圓を持參す可し寄宿を望むものハ本校の熟舍に入れ其監督を受けしむ

明治二十四年一月始業

東京麴町下六番町六番地
明治女學校内
女子職業部